

2015年5月29日

国立大学法人 京都大学  
総長 山極壽一 殿

一般社団法人 日本建築学会近畿支部  
支部長 小坂郁夫



京都大学吉田寮の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、貴学吉田寮については、新聞報道により改修の可能性もあるように聞き及んでおります。

本建築は京都帝国大学寄宿舍として1913年（大正2）に建設されたものであります。その部材は1889年（明治22）に建設された第三高等中学校寄宿舍を転用したものであり、工法、装飾において、創建時にまでさかのぼりうる個所も数多く見られます。

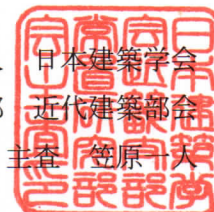
吉田寮は現役で使われている最古の学生寮であり、文化史的価値のみならず建築学上も重要な意義を有する存在であります。その建築的価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代日本の歴史的建築資産としてかけがえのない存在であります。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値についてあらためてご理解いただき、本建築の保存活用を図るための方途を積極的にご検討下さるよう、お願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

一般社団法人  
近畿支部



## 京都大学吉田寮についての見解

### 1) 建物の概要

京都大学吉田寮は京都市左京区吉田二本松町の京都大学吉田南キャンパス内に所在する。当初は京都帝国大学寄宿舍として 1913 年（大正 2）に建設された。京都帝国大学は 1897 年 9 月に創設された。敷地と施設は、1889 年（明治 22）に設置されていた第三高等学校（1904 年に第三高等学校）のものを引き継いだ。三高は従来校地の南側を占める吉田二本松町の土地 18000 坪を京都府から寄付を受けて移転することとなる。

新設の京都帝国大学の学生寄宿舍は、当初は三高の寄宿舍（現在の文学校舎付近に所在、1889 年竣工）を襲用したが、文学部・法学部の施設を拡充すべく、1913 年（大正 2）年にいたって現在の位置に新築移転する。この場所は京都府から寄付を受けた敷地の一部で、当初は医科大学の仮教室が簡素な木造で建てられた。1901 年以降、西方の敷地に校舎が整備されていき、1910 年に法医学教室本館竣工で一段落した時点で、仮教室群が取り壊され、大学学生のための福利厚生施設が建設されていくことになる。1911 年の学生集会所、翌 12 年の武道場につづいて寄宿舍が移転した。

三高寄宿舍は 3 階建てが 1 棟で、これに平屋の食堂が附設されていた。京大寄宿舍はこれを 2 階建て 3 棟に再構成して建設され、食堂は当初の形状を保ったまま再建された。三高寄宿舍の設計は他の施設同様、山口半六と久留正道が担当したとみられる。また京大寄宿舍の設計は山本治兵衛と永瀬狂三が担当した。

1941 年に 3 棟のうちの中寮の一部が焼失し、再建された。1996 年には学生ボックス棟（旧武道場）が焼失した際に食堂の西側一部が被害を受けた。2014 年に食堂が補修された。なお、公式に「吉田寮」の名が与えられたのは 1959 年である。

吉田寮は木造 2 階建て、一部平屋建てで、屋根は寄棟造、棧瓦葺き。外壁は下見板張りとする。竣工時には薄い緑色にペイント塗装されていたとみられる。

北寮、中寮、南寮の東西に長い 2 階建て 3 棟が中庭を挟んで南北に並列し、西端で平屋建ての管理棟が南北につなぐ。南北約 94 メートル、東西約 53 メートル、建築面積約 2000 平米。

居室は 1 人部屋用と 2 人部屋用とがあり、すべて畳敷きの和室で、現状では 8～10 畳が 26 室、6～7.5 畳が 95 室、定員 147 人となっている。1、2 階とも北側に片廊下を配し、その端部近くに階段 2 個を置く。各室は南北に長く並べられる。

## 2) 歴史的価値

明治以降の洋風建築の普及にあたって、教育施設と産業施設は社会的需要が非常に高かった。それだけに、中心的存在の校舎あるいは工場棟とは別に非常の多くの学生寮や寄宿舎が西洋的な建築意匠・技術によって建設された。重要文化財の龍谷大学南北齋（1879年）はベランダモチーフによる学生寮であり、明治の西洋化の息吹をよく伝える。また札幌農学校寄宿舎恵迪寮（1905年）は1983年に閉鎖後、1985年に野外博物館「北海道開拓の村」に一部が移築復元されている。ただ、こうした少数の例外を除き、戦前期に建てられた学生寮は1980年代までにほとんど建て替えられ、現在まで使用されている遺構は稀少であり、当吉田寮が最古の遺構である。

特に東端に置かれた便所や階段室の構成には前身建物である三高寄宿舎の様態が残されていると考えられ、明治前期の建築技術を知る上で貴重な資料であるといえる。

寄宿舎の設計においては、1900年前後（明治40年前後）に中廊下をはさんで居室を南北に配置する平面構成は衛生的見地から減っていき、北側に廊下をとって居室を南面させるパターンが定着する。居室のあり方については、高校までは寝室と自習室を併置し、寝室は4人～8人部屋が通例であった。これに対して吉田寮は大学生のための寮として1人部屋であり、紳士扱いの現れと見られていたという。いふならば、学生寮の形式が安定した時期に、そのエリート版として建設されたのが吉田寮であったと位置づけられる。

## 意匠的・景観的価値

吉田寮の外観意匠は、1900年前後に定型化された木造下見板張りを踏襲する。しかし、東西に長く延びる構成はおのずから独特の偉観を呈する。また階段手すり親柱、玄関まわり天井ブラケットなどに装飾が施され、また換気用の屋根窓をアクセントとして配する意匠的配慮も見逃せない。

京大キャンパスは1889年の三高開設時以来の累層が特徴である。明治・大正・昭和・平成の4代にわたる建築物の併存という特徴は本部構内、特に時計台周辺ではある程度意識され、歴史的環境の保全が試みられている。また医学部構内でも解剖学教室では明治期の木造・煉瓦増建築物が保存されている。そうした中、南部構内は必ずしもそうした観点からは注目されてこなかったが、あらためて見てみると際だった特徴を示していることがわかる。

ゼツェッションの影響を見せた学生集会所は近年姿を消したが、当建築の南側には1925年に建設された楽友会館が存在する。京大創立25周年記念事業の一つとして企画されたもので、設計は京大建築学科助教授の森田慶一である。森田は東京大学卒業時の1920年に分離派建築会を組織して前衛的な建築運動を展開したが、ここでも表現主義的な反転曲線を持つY字型の柱など、斬新な造形を見せる。すなわち、南部構内に現存する2つの建築は12年間ほどの時間差しかないが、19世紀的な吉田寮と1920年代の先端的な傾向を示す楽友会館一とが並び立って、20世紀の建築造形の転換を示す場となっている。

以上、吉田寮は建築史的に見て稀少な存在であり、これを中心に置く南部構内は良質な歴史的環境を形成しているといえることができ、その保全と適切な活用を強く希望するものである。